

クレマン・マロの『詩篇』¹について

— 16 世紀フランス語の一定点として —

江 口 修

16 世紀のフランス詩が 19 世紀ロマン派の手によって再発見され称揚されるまでほぼ 200 年間忘却の淵に沈んでいた。そしてロマン派の志向に染められた再評価を打破し学問的な評価に耐える研究の構築に大きな役割を果たしたのは実はイギリスの形而上詩人研究者たちであった。イタリアのペトラルカやピエトロ・ベンボから一足飛びでイギリスにシェークスピアやジョン・ダンが登場するのは文化的影響関係のあり方からしておかしい、すなわちどこかにミッシング・リングが存在するに違いないと考えた彼らは、16 世紀のフランスを発掘しその豊穡な世界に瞠目した。現代アメリカを代表する作家ポール・オースターも次のように述べている。

16 世紀、英語が言語として、そして文学として成熟を遂げた時期にも、英語の代表的な開拓者であるワイアットやサリーはクレマン・マロの作品に着想を見出したし、次世代における最大の詩人スペンサーも処女作の表題をマロに負っているばかりか、そのうちの二節は内容もマロからじかに借用している²。さらに重要なことに、スペンサーは 17 歳のときに

¹ Clément Marot, *les Psaumes en vers français*, 本小論で参照した版本は、主として *Cinquante psaumes de David mis en francoys selon la vérité hébraïque*, Honoré Champion Editeur, 1995 であるが、適宜 1562 年ジュネーブで出版された Michel Blanchier 版の写真復刻版である *Les Psaumes en vers français avec leur mélodies*, T.L.F., Droz, 1986, および Frank LESTRINGANT *L'Adolescence clémentine*, nrf, Gallimard, 1987 所収の *Quatorze Psaumes* も参照した。

² スペンサーの処女作とは、*Shepherd's Calendar* (1579) であるが、マロで対応する箇所というと、*L'Adolescence clémentine* の冒頭 *La première églogue des Bucoliques de Virgile*, *op.cit.* pp. 49-54. であると思われる。

ジョワシャン・デュ・ベレの作品の英訳を試みており、これは英語で書かれた初のソネット集でもある。……

話はスペンサーに限らない。エリザベス朝のソネット詩人のほぼ全員がプレイヤード詩派に範を仰いでいるのであり……³

確かに、ソネット（フランス語では「ソネ」）の伝播という観点からするとフランスの先行性を認識した点で首肯できる指摘ではあるが、同種の趣向は広く認められる訳で、むしろ16世紀におけるヨーロッパでのルネサンスの広がりや文芸復興の具体的例証として見るべきではないだろうか。ともあれ、フランスでは16世紀の詩は17世紀に入り忘却の淵に追いやられたのであり、イギリスでもフランスの影響どころかペトルルカさえ忘れ去られ、まるでソネットが英文学の専売特許であるかのような状況が出来たのである。だが、奇跡的に文字通り歌い継がれた詩があった、それがマロの『詩篇』である。メロディーの付けられたこの歌はプロテスタント達によって18世紀半ばまで歌われ生き延びたのである。宗教的典礼および儀式を否定したプロテスタントであるが、ジュネーブを牛耳ったカルヴァンは宗教心の涵養のためにはなによりも信徒の心に直に響く言葉が重要であると考えた。例えば、カルヴァンの右腕であったテオドール・ド・ベーズはジュネーブを殆ど離れようとしないうるカルヴァンに代わって情報網を構築するべく精力的にフランスをはじめとして有力者との接触に努めた⁴。なぜベーズは『詩篇』をフランス語圏のプロテスタント達の信仰実践に有益として独自の刊本として出版したのだろうか。おそらく、マロのフランス語にスタンダードになる可能性を認めたからではないだろうか。そしてわれわれは、マロの詩法に中世の残存を見

³ Paul Auster, *The Art of Hunger, expedit edition, 1997, Penguin Books, p. 200.* 日本語訳は柴田元幸／畔柳和代訳『空腹の技法』2000年、新潮社、p.211.

⁴ Théodore de BÈZE, 現在その書簡集 (*Correspondance de THÉODORE DE BÈZE*, Droz, 1960-, les 28 vols parus) が刊行中であり、その膨大な資料からは幾多の作家、作品について新たな視点を得ることができよう。

てきた従来の研究に対し、マロの口語としての同時代性あるいは先進性を主張することもできるのではないだろうか。

*

では、マロはなぜ『詩篇』を翻訳したのだろうか。推測の領域を出ない問題であるが、とりあえず『詩篇』翻訳をめぐるマロが置かれた状況を整理して置こう。

父、ジャン・マロが宮廷に取り立てられ出身地カオールを発ったとき9歳のクレマンも同道したが、カオールはケルシー地方の中心地、ラングドック地方の北方であり、この旅はまさに《フランス行き》であった。1539年のヴィレール・コトレ勅令⁵により各教区の司祭は洗礼記録をきちんと残すようになり、戸籍に準じたものが整備されるようになるわけだが、われわれにとってクレマン・マロという立派な固有名詞も、当時は決してそうではなかった。クレマン・マロも署名には中世以来の伝統に則り常に名前の後には「ケルシー地方カオール出身の」⁶を付けたが、他の詩人たちがあまり用いない署名法であり、単なる伝統以上に故郷への愛着が強いことを示していると考えてよい。父ジャン・マロはアンヌ・ド・ブルターニュの書記官として出仕し、その後同妃の修史官にまで出世している。いろいろな学寮教師に預けられたクレマンは、1514年頃最初の詩作を試みている。同時に小姓として、国王の財務書記官にしてヴィルロワ領主のニコラー世・ド・ヌフヴィル⁷に仕え始めた。そして最初に印刷された詩として同年、父の仕える王妃アンヌ・ド・ブルターニュの娘クロード・ド・フランスとフランソワ・ダングレーム⁸の結婚の祝

⁵ Ordonnance de Villers-Cotterêts, 裁判においてフランス語を用いることを命じフランス語の伸張を促した勅令として有名。

⁶ Clément Marot, de Cahors en Quercy という表記になるがこの場合の《de》はもちろん貴族を示す封地や領地を示すものではなく出身を示すだけのものである。

⁷ Nicolas I^{er} de Neufville

⁸ Claude de France と François d'Angoulême

歌⁹を発表する。新郎は無論翌年フランソワ一世としてフランス国王に即位するフランソワである。フランソワ一世は即位後ただちにイタリアに出兵、マリニヤンの戦いで勝利を取め、フランスはルネサンスへと一挙に進むことになる。もちろん、一方で1517年にはウィッテンベルグでルターが《九十五カ条提題》を発表、宗教改革の口火が切られる。

さて、クレマンが詩人としての大きく成長するきっかけとなったのが、1519年、フランソワ一世による、その長姉、アランソン公妃のマルグリット・ダングレーム¹⁰へのクレマン《贈与》である。だが、この年はフランソワ一世がその仇敵シャルル・カン（カール五世）と神聖ローマ帝国皇帝の座を争って敗れた年でもある。この年以降フランスは軍事的にも困難に陥ってゆくことになる。1514年にはシャルル・カンはプロヴァンスに侵攻、同時にパリ近郊のモーで最初のプロテスタントによる檄文事件が起きる。1525年、パヴィアで大敗を喫したフランソワ一世は捕虜となる。ソルボンヌはこれを好機と捉えたのか、クレマン・マロを「ラードを食った」¹¹ 嫌疑でパリのシャトレ牢獄に収監した。この後、ソルボンヌとマロの確執が生涯続くこととなる。他方、フランソワ一世の釈放交渉に赴いたのは、王不在の間摂政を務めたルイーゼ・ド・サヴォワとマロが使えたマルグリット・ダランソンの二人であった。

⁹ *Le Temple de Cupido* のこと、印刷は翌年のことのように見える。また1538年リヨンで出版された作品集では、Nicolas I^{er} de Neufville に献じられて採録されている。フランソワ一世との関係において彼の果たした役割は相当重要だったようである。

¹⁰ Marguerite d'Anglême, Charles de Valois と Louise de Savoie の娘、1509年 Alençon 伯 Charles と結婚、後1527年に Navarre 王 Henri d'Albert と再婚。そのナヴァールの宮廷は人文主義者、福音主義者の集まる場所となる。ソルボンヌの強硬派からフランス王家獅子心中の虫と目されるが、フランソワ一世の信頼厚く、追及の手を逃れた。文学史上は Marguerite de Navarre として扱われる。

¹¹ 《avoir mangé le lard》四句節の断食中に公衆の面前で「肉」(lard は当時脂身だけを意味せず、広く脂分の多い肉を指した)を食らったという嫌疑で、投獄された。訴追人がソルボンヌ当局の者でなくパリ市当局の者であったことが結果的には幸いしたようである。

この交渉が遠因になったかと思われるのだが、後に 1540 年 1 月、シャルル・カンがパリに入城した折、『詩篇』のコピー¹²を一部皇帝に献呈している。今日から見れば、考えられないような行為であるが、フランス国王と神聖ローマ皇帝との間につかの間成立していた和平と、王の長姉の後ろ盾もあってか、ヴィルマドン¹³の勧めに従ってのことであった。

つまり、マルグリットに従いその宮廷に集う人文主義者たちの学殖に触れ、カトリックの内部改革を求める福音主義（結局はソルボンヌの過激派からみればルター派、カルバン派となら変るところのない異端であるが）に賛同したクレマン・マロは 1520 年代から十数年の歳月を掛けて、『詩篇』の翻訳に挑んだことになる。宮廷におけるマロの絶頂期は 1528 年から 34 年にかけてのこととみなされるが¹⁴、マロの『詩篇』の翻訳（第六詩篇）が初めて世に現れたのはマルグリット・ド・ナヴァールの『罪深き魂の鏡』¹⁵への挿入によってである。以下引用しておく（右側にオリヴェタンの仏訳聖書¹⁶の該当箇所を掲げておく、筆者の判断で適宜改行を施している）。

Ne vueilles pas, ô Sire,	Seigneur ne me reprends point en ton ire
Me reprendre en ton ire,	ne me chasse point en ta fureur.
Moy, qui t'ay irrité:	Seigneur, aye mercy à moy:
N'en ta fureur terrible	car je suis malade : guaray moy Seigneur

¹² *Les Trente Psaumes*, その他 *Oraison dominicale* と *Salutation angélique* そして *Symbole des apôtres* も入っている。

¹³ *Villemadons*, cf. *Cinquante psaumes de David mis en francoys selon la vérité hébraïque*, Honoré Champion Editeur, 1995, pp. 28-29.

¹⁴ 1527 年に王の従者に任ぜられているが、恐らくマルグリット・ダランソンの再婚に伴う措置であろうが、王の求めもあったと思われる。実際には翌年 28 年から出仕し俸給を受け始めている。マルグリットの庇護がその後も続いたことは言うまでもない。

¹⁵ *Miroir de l'âme pécheresse*, この書はソルボンヌから検証を要求されたが、フランソワ一世のとりなしでことなきを得る。

¹⁶ *La Bible d'Olivétan*, 1535, 臨川書店の復刻版（1992 年）を参照。

Me punir, de l'horrible car mes os sont troublez.
 Tourment, qu'ay merité. Et est mon âme grandement troublee:
 mais toy Seigneur
 Ains, Seigneur, vien estendre Jusque a quand poursuyvras tu?
 Sur moy ta pitié tendre, Seigneur rentre toy
 Car malade me sens. delivre mon ame
 Santé donques me donne: me sauve par ta grace.
 Car mon grand mal estonne
 Touts mes oz, & mes sens.

Et mon esprit se trouble
 Grandement, & au double,
 En extremes soucy.
 O Seigneur plein de grace,
 Jusques à quand sera-ce
 Que me laisseras ainsi?¹⁷

¹⁷ この部分は新共同訳では次のようになっている。

主よ、怒ってわたしを責めないでください／憤って懲らしめないでください。
 主よ、憐れんでください わたしは嘆き悲しんでいます。
 主よ、癒してください、わたしの骨は恐れ
 わたしの魂は恐れおののいています。／主よ、いつまでなのでしょう
 ……

ちなみに新共同訳の底本はシュツツガルト版ヘブライ語聖書（ドイツ聖書協会）であり、フランスで最も広く用いられているイエルサレム聖書もほぼ同じ内容である。ただし昨年2004年同聖書の新訳が刊行されたが、ヘブライ語原典にできるだけ忠実なフランス語訳という方針で、かなり大胆な変更がなされているので引用しておくことにする。

Non
 Yhwh ne me punis pas dans ta colère
 Ne me condamne pas dans ta fureur // Montre-moi ta bonté Yhzh / je suis comme fané /
 Guéris-moi Yhwh / mes os tremblent / Mon souffle tremble tellement

かなり大胆な翻訳である。しかしこの簡潔で力強いパロールは大方の感動を誘ったようだ、フランソワ一世もシャルル・カンへの『詩篇 30 篇』献呈の前年、これを読み激賞したとのことである。マルグリットにすれば、マロのこの天賦の詩才をもって、ややもすれば詩的文彩はつきり言えば韻の華やかさに欠ける妃の書を飾ろうとしたのだろうか。あるいは、直裁な信仰心の発露の典型として称揚しようとしたのか。

* *

だが、すぐに一つの疑問が湧いてくる。なぜ『詩篇』だけなのか、聖書の本体にはなぜ取り組まなかったのか。詩人にとってもっとも取り組み易いのは、歌うために作られたと思われる『詩篇』だからというのが大方の見方であり、それに『聖書』本体の聖性はソルボンヌが絶対に譲らないところであるから、ダビデ王という人間の言葉である『詩篇』は唯一翻訳が許されるであろうという見解を加えるというのが、現在の研究者の一致するところである¹⁸。もちろん、マルグリットのサロンにはフランスで最初に聖書の仏訳を行ったジャック＝ルフェーヴル・デタープル¹⁹が出入りし、当代一の人文主義学者として尊敬を集めていたことを考えれば、厳密な原典批評に基づく翻訳と詩的インスピレーションの発露との間には越え難い懸隔があったとみるべきで、それぞれ得意な分野を担当しマルグリットの理想の実現を支えるという構図として捉えるべきであろう。ともかく 150 篇ある詩篇のうち、1562 年の『メロディー付きフランス語版詩篇』でマロの翻訳とされているのは 49 編、残りはペーズのものとしてされている。ここで、一応 2 つの刊本について対照表を作成しておこう。

¹⁸ これについては、*Cinquante psaumes de David mis en francoys selon la vérité hébraïque*, Honoré Champion Editeur, 1995 の編者 Gérard Defaux の導入解説を参照のこと。

¹⁹ Jacques Lefèvre d'Étaples, その仏訳聖書は *La Bible d'Anvers* と呼ばれ 1530 年に出版されている。

	1543年版	1562年版
43年版 で既訳と された 30篇	I~XV, XIX, XXII, XXIV, XXXII, XXXVII, XXXVIII, LI, CIII, CIV, CXIII~CXV, CXXX, CXXXVII, CXLIII,	I~XV, XVIII, XIX, XXII~XXV, XXXII, XXXIII, XXXVI~XXXVIII, XLIII, XLV, XLVI, <u>L</u> , LI, LXXII, LXXIX, LXXXVI, XCI, CI, CIII, CIV, CVII, CX, CXIII~CXV, CXVIII CXXVIII, CXXX, CXXXVII, CXXXVIII CXLIII,
同版で新 訳とされ た20篇	XVIII, XXIII, XXV, XXXIII, XXXVI LXIII, XLV, XLVI, LXXII, LXXIX LXXXVI, XCI, CI, CVII, CX, CXVIII CXXVIII, CXXXVIII, LE CANTIQUE DE SIMEON	<u>LES COMMENDEMENTS DE DIEUX</u> LE CANTIQUE DE SIMEON

異同は2箇所しかなく²⁰、マロの『詩篇』仏訳がかなりしっかりしたものと
して共有されていたことが伺える。この中から、レストランガンは前掲の詩
集に14篇を選んで採録しているがそれは、III, IV, VI, VII, XIX, XXII,
XXXIII, CIV, CXIV, CXV, CXXVIII, CXXX, CXXXVII, CXXXVIII,
である。先の表の区分で言えば新訳とされているものからは、XXXIII,
CXXVIII, CXXXVIII の三篇が採用されている。まずはこの三篇について
見ておこう。まずは第三十三（右側にオリヴェタンオリヴェタンの仏訳を並置して置く）。

Resveillez vous chacun fidele, Vous justes estouffés devant Seigneur car c'est
Menez en Dieu joye orendroit, belle chose aux draicturters quand ils se louent
Louange est tresseante & belle Louez donc le Seigneur par Harpe & Etoffe

²⁰ 詩篇第50について、これがマロ訳でないとは断定することはできないが、例えば押韻を見るため若干引用してみよう。

Ayant un feu devorant devant luy,
D'un vehement tourbillon circuy:
Lors hucherq & terre & ciel luisant,
Pour juger là tout son peuple, en disant,
Assemblez moy mes saints, qui par fiance
Sacrifiants, ont prins mon alliance.

以後ほとんど同じ調子で押韻が行われている。まるでアクロバットのような韻を踏むマロにしては若干平板すぎるように思われる。

En la bouche de l'homme droit: Chantez lui chanson nouvelle/traitez bien la
Sonnerie avec triumph...²¹

Sur la douce harpe
Pendue en escharpe
Le Seigneur louez,
De lutz, d'espinettes
A son Nom jouez.²²

フランス語にリリズムをもたらしたと評される見事な詩である。マロの真骨頂はおそらくなものにも縛られない自由なインスピレーションにある。ペトラルカのソネをいち早く翻訳したのも彼であった。『詩篇 50 篇』の序にあたる「すぐれてキリスト教的なる王へ」²³の中で次のように語っている。

Fables n'y sont plaisantes mensongeres
Ne des mondains les amours trop legeres.
Ce n'est pas cy le Poète écrivant
Au gré du corps à l'esprit estrivant.
Ses vers divins, ses chansons mesurées
Plaisent, sans plus, aux ames bineheurées,
Pource que là trouvent leur doux amant
Plus ferme & clair que nul vray dyamant,
Et que ses faitz, sa bonté & son pris,
Y sont au long recités & compris.²⁴

²¹ *Op.cit.*

²² *Cinquante pseumes de David mis en francoys selon la vérité hébraïque*, pp. 170-171.

²³ *Ibid.*, p. 96, *Au Roy treschrestien francoys*

²⁴ *Ibid.*

詩人は決して軽薄な言葉遊びを生業とする者ではない、「肉体のおもむくままに、しかし切磋琢磨する精神をもって《書く》詩人」こそが真の詩人なのだ。レストランガンが言う《vocalité》の詩人がいる、すなわち、決して精神のみによって書くのではない、肉体というパロールの棲家をよく知る者として、真実へと向かう言葉を獲得することのできる詩人が。続いては詩篇第128である。

Bienheureux est quiconques	Bienheureux est quiconque crainte le Seigneur
Sert à Dieu volentiers,	chemine en ses voyes.
Et ne se lassa onques	Car tu mangeras le labour de tes mains:
De suivre ses sentiers.	tu seras bienheureux/et bien te fera
	Ta femme fera comme une vigne fructueuse costez
Du labour que sçais faire	de ta maison...
Vivras commodement,	
Et ira ton affaire	
Bien, & heureusement. ²⁵	

これもオリヴェタンと比較したとき、いかに洗練度が高いかが認識できるだろう。もちろん逐語訳風のオリヴェタンと比較すること自体があまり意味のあることであるとは言えないが、マロの『詩篇』が平信徒にとっても実に素直に心に入ってくる、まさに真実のパロールであることがよく理解されるだろう。カルヴァンとペーズがここに目を付けたことは容易に見て取れるだろう²⁶。もちろんこのことがマロの身の上にとって災いとなって降りかかる

²⁵ *Ibid.*, p. 203.

²⁶ cf. Michel JEANNERET, *Marot traducteur des Psaumes entre le néo-Platonisme et la Réforme* in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance* T. XXVII, 1965. カルヴァン自身の言葉として「会衆の祈りの形でいくつかの詩篇を歌うことは教会の前進にとって時宜に叶うことである」が冒頭引用されている。

のだが、マロ自身ユグノーやジュネーヴのプロテスタントたちに共鳴しつつも、実際に亡命してみると、その頑な雰囲気にも馴染めずついに公衆の面前で自己批判をしては帰国するという醜態を繰り返してしまうのである。最後に詩篇 138 である。

Il faut que de tous mes espritz Je te rendray graces de tout mon coeur: je te
 Ton los & pris chanteray psalmes en la presence des souverains
 J'exalte & prise Je me enclineray a ton saint temple...
 Devant les gens me presenter,
 Pour te chanter,
 J'ay fait emprise²⁷

大胆と言えばまさに大胆、しかし見事な「編曲」振りではないだろうか。ソルボンヌからすれば、神聖なる聖書を愚弄する所業でしかないことは言うまでもない。マロはトレント公会議開始前年の 1540 年の 9 月に亡くなった。つまり本格的な宗教対立の前にこの世を去ったわけだが、フランス語訳の『詩篇』が結局はプロテスタントの世界でしか生き残らないだろうことが決定的になる様を眺めるはめに陥ることはなかった。マロは自身のフランス語に相当な自信を抱いていたようだ。シャルル・カンへの献呈にしても、フランス語をほぼ母語とする皇帝に対する思い入れがあればこそではなかったか。

最後に、マロの翻訳『詩篇』群の中心となるであろうものを分析しておこう。第三詩篇である。翻案といってもよいほどの変更振りであるが、しかし「祈り」の強度からすると実に素晴らしいリズムとテンションの盛り上がりが見てとれる。まず旧版のイェルサレム聖書と新訳のフランス語を並置して見ておこう。第二連である。

²⁷ *Op.cit.*, p. 204.

Mais toi, Yahvé, mon bouclier, Mais toi Yhwh tu es le bouclier qui m'entoure
 ma gloire! tu me redresses la tête. tu es mon importance
 A pleine voix je crie vers Yahvé,
 il me répond de sa montagne sainte.²⁸ Celui qui tient ma tête haute
 Yhwh
 Ma voix crie vers lui²⁹

そしてマロはこの部分を次のように訳出している。

Car tu es mon très seur
 Bouclier et défenseur
 Et ma gloire éprouvée.
 C'est toi (à bref parler)
 Lequel me faits aller
 Haut, la tête levée.
 J'ai crié de ma voix
 Au Seigneur maintes fois.³⁰

4連（場合によっては5連）の詩篇をマロは大胆にも倍増させ8連の詩にしている。この詩篇はグヴィデ王がその子アプロサム軍の軍勢に取り囲まれ、危うく難を逃れたとき、神に絶対の信を置くことを誓ったことを歌っている。ある意味でマロは自分を取り巻く状況の厳しさを認識するとともに決意も新たに状況に立ち向かうべく自分を鼓舞しているのではないだろうか。この詩篇はかなり早くに翻訳されたと考えられており、マロにとって、『詩篇』のた

²⁸ *La Bible de Jérusalem*, 13^{ème} édition, 1992, p. 716.

²⁹ *La Bible, nouvelle traduction*, 2001, p. 1150.

³⁰ *Op.cit.*, p. 105.

めのフランス語のモデルとして機能しているとみなしたい。

状況に臨機応変に対応して詩作する詩人、それがクレマン・マロである。出来事に対して当意即妙に、しかも韻も湧き上がる泉のごとくに次から次へとひねり出すマロは、マルグリット・ド・ナヴァールの秘蔵っ子としてフランス宮廷の寵児へと駆け上がっていった。われわれは、そこに時代のフランス語発展の呼び水となるパロールの輝きがあったからではないかとも考える。詩篇に見るマロの実験精神と着実に人の心を捉えるパロールの現前、マロを再び時代の前景において逆に時代を照射してみてもよいのではないだろうか。言い換えれば、マロの詩篇のフランス語に、時代を導くベクトルを読み解くべきときが来ていると言いたい。トレント公会議以前にそしてプレイアド派登場の前に亡くなったクレマン・マロだが、ロンサールのフランス語と比較してもそのフランス語は時代を超えて若々しさを保っている。先ほど「肉体のおもむくままに、しかし切磋琢磨する精神をもって《書く》詩人」³¹が《poète écrivain》マロであるとすれば、詩人中の詩人として完成度のモデルたるべく詩行を彫琢してゆく《poète écrivain》がロンサールであると言いうるかもしれない。つまり同じ「愛」を語ってもマロのそれは「幸いなる魂にさっと響き／いかなるダイヤモンドよりも確固として清明な／優しき恋人を見出すことが……」³²できるものだとすれば、ロンサールは「真理を包むマントたるアレゴリー」の世界に人を誘い込む。恐らくだれもマロのリリスムと詩的パロールの若々しい力を否定することはできないだろう。

最後に若干の補足をしておきたい、テオドル・ド・ベーズについてである。先にいかにも冷徹な戦略家のように紹介したが、彼もまた詩神と遊ぶ喜

³¹ 既出、注) 24

³² Ibid.

びをよく知った人間でもあった。そして当時「口語」と呼ばれたフランス語の母語としての力こそ新時代を開拓するものであることを見抜いてもいた³³。だからこそ、トレント公会議がカトリックの典礼面での建て直しによってプロテスタントに対抗しようとしたのに対し、1562年第三次（そして最後の）公会議が開始されるのに歩調を合わせるようにして、「メロディー付きの」詩篇仏訳を刊行したのだ。詩の喜びと信仰上の要請をうまく折り合わせたこのペーズの行き方が、プロテスタント信者の間に限られたとはいえ、マロのフランス語、すなわちフランソワ一世時代のフランス・ルネサンスの息吹がその後も歌い継がれることを可能にしたのである。だが、クレマン・マロは宮廷に出仕する父に従って「フランスに行った」つまり、フランス語は外国語の人間ではなかったか。最後にレストランガンの言葉を引いて本小論を閉じることにしたい。フェラーラに亡命中のマロがフランスの宮廷についてこう語った言葉である。

フランスの宮廷は自分の「学校の女先生」である…… この女教師は彼に母語のオック語に代わるフランス語の話し方を教えただけでなく、また語法と文体を磨き上げることに満足することなく、マロとの言葉のやり取りが始からスムーズに行われるように、活気に満ち、輝かしくも

³³ たとえば、1583年の時点でも、ペーズは知人に宛てて次のように薦めている、「もしマロの著作集をお持ちであれば、弟子たちに宛てた「子供たちよ、ひとつ教えを聞いたまえ」で始まるエピグラムの規則が見つかることでしょう。それこそがあなたにお示ししたかったことなのです。しかもあなたにわたしの思いがどこにあるのかも示してくれています。近いうちにフランス語の発音と書き方を扱った本が出てくることになっていますので、必ずお送りしましょう。」(Lettre à Anthony BACON, Gnève, le 18 décembre 1583 in *Correspondance de THÉODORE DE BÈZE*, T. XXIV, pp. 330-331. また1551年頃、リヨンの詩人がペーズとマロの詩を比較してペーズが遥かに劣っていると断じたのに対して反論した詩によるやりとりもある (*Ibid.*, T. I, pp. 210-214)。リヨンはパリとジュネーブそしてイタリアを結ぶ交通の要衝であり情報の集まる場所であった。プロテスタントとカトリックの動きが交錯する中、またミューズ(詩神たち)の遊ぶところでもあったようだ。

ときに危険な打ち解けた雰囲気にも満ちた環境を創造したのだ³⁴。

マロにとって、マルグリット・ド・ナヴァールの宮廷サロンとそれを庇護しソルボンヌからの火の粉を払い続けてくれるフランソワ一世の宮廷なくしては、世界は無きに等しかったであろう。ともかくも、オック語話者がフランス近代を開いた宮廷をバネに、何度も亡命の憂き目に遭いながら³⁵、時代のフランス語の粋を体現するに至る、まさに古風な言い回しを用いるならば、波乱万丈の成功譚である。本小論では、『詩篇』に集中して見てきたが、今後は1630年代という時期を集中的に取り上げて、フランス語の様相を精査して見ることにより、われわれの推論を検証してみたい。

³⁴ *Op.cit.*, p. 25.

³⁵ マロは1534年にプロワ滞在中に高等法院から逮捕状が出され弁明する暇も無く逃亡、同時にパリの居宅への搜索令状も出され、恐らく翻訳中だったであろう『詩篇』も含めて手稿のほとんどが燃された。ボルドーで逮捕されるも尋問の後釈放。これ以後翌年1535年のイタリア、フェラーラへさらに36年ヴェニス。この年許されてフランスへ帰国、カトリックの堅信を誓う。42年には彼の仏訳『詩篇』が禁書処分になりジュネーヴに亡命。43年にジュネーヴを去りアヌシーへ、そこで帰国の機会をうかがう。だが叶わずシャンペリーからピエモンテ地方を経てトリノへと至りそこで死去。享年48歳であった。